法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-09-03

金融ビジネスの考え方

武田, 浩一 / TAKEDA, Koichi

(出版者 / Publisher)
法政大学経済学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
The Hosei University Economic Review / 経済志林
(巻 / Volume)
74
(号 / Number)
3
(開始ページ / Start Page)
245
(終了ページ / End Page)
255
(発行年 / Year)
2006-12-25

【経済学研究のしおり】

金融ビジネスの考え方

武　田　浩　一

1．はじめに

金融は，「お金」がこの世に登場して以来，いつの時代のどんな国でも，経済の安定と発展に欠かせない重要な位置を占めており，その動向は世の中の注目を集めてきた。しかし，バブル景気とその崩壊，その後の深刻な景気低迷や金融危機，そしてデフレ不況からの経済の再生という，史上まれに見る経済と金融の激動に見舞われた過去20年間の日本ほど，金融の動向に人々が一喜一憂した時代はほとんど例がないだろう。今日本で生活している諸君は，まさに金融激動の時代の「生き証人」となるわけである。

実際，今金融の現場では，とても興味深いことが次々と起きている。ニュースで盛んに取り上げられた最近の比較的身近な例だけでも，銀行窓口での普通の預金以外の多様な金融商品の販売，パソコンや携帯電話を利用したインターネット金融取引の一般化，電子マネーやコンビニATMの普及，個人のお金が銀行預金から国債や株式，投資信託などへ向かう「貯蓄から投資へ」の流れや，そして日本版金融ビッグバン，ペイオフ解禁，郵貯の公社化・民営化から最近の金融サービス関連法の整備までの一連の金融制度改革など，枚挙にいとまがない。また，表１を見れば，日本の上場企業の株式時価総額（企業の市場価値）ランキングにおいて，上位20社のうち６社，上位５社の中では過半数の3社を金融機関が占めていることが

表1　日本の上場企業の時価総額ランキング（単位：兆円）

順位	企業名	時価総額	業種
1	トヨタ自動車	23.2	輸送機器
2	三菱ＵＦＪフィナンシャルグループ	16.4	銀行
3	みずほフィナンシャルグループ	10.9	銀行
4	三井住友フィナンシャルグループ	9.5	銀行
5	日本電信電話	9.1	情報通信
6	ＮＴＴドコモ	8.5	情報通信
7	キヤノン	8.2	電気機器
8	本田技研工業	7.3	輸送機器
9	武田薬品工業	6.7	医薬品
10	松下電器産業	6.1	電気機器
11	日産自動車	6.0	輸送機器
12	ソニー	4.8	電気機器
13	東京電力	4.6	電気ガス
14	日本たばこ産業	4.6	食料品
15	野村ホールディングス	4.5	証券
16	りそなホールディングス	4.0	銀行
17	三菱商事	3.7	卸売
18	セブン＆アイ・ホールディングス	3.7	小売
19	デンソー	3.7	輸送機器
20	ミレア・ホールディングス	3.6	保険

注：時価総額は2006年9月末の終値ベースの数字。
出典：日経金融新聞，日本経済新聞，および各社ウェブページ掲載データより作成。

分かる。日本版金融ビッグバン以来，日本では業態の垣根や国境を越えた大規模な金融再編が急速に進行しており，三大メガバンクの形成を筆頭に近年一気に進んだ金融ビジネスの巨大化・寡占化は，全ての産業の中で際立っている。このような金融ビジネスの地殻変動的な動きは，個人や企業の経済活動に大きな変化をもたらしており，金融の動きをある程度知らなくては経済やビジネスの先行きがよく読めない状況になっている。

金融の現場で起こっている現象は奥が深く，直感的に見ているだけでは表面的な動きに惑わされてその下に隠れている本質が見抜けないことがある。しかし，経済学の論理を活用して一つ一つの現象を掘り下げて考えていくことができれば，それまでは見えなかったものが見えてくるようにな

り, 金融の本質についての理解を深めることができるようになる。そこで, 以下では「金融ビジネスの考え方」ということで, 現在大学生の諸君が今後金融ビジネスの世界にかかわっていく際に, その現場で起きることを深く理解するのに役立つ経済学的な金融ビジネスの見方をきちんと身につける手がかりになる学習の指針を提示したい。なお, 諸君の多くが手軽に取り組めるように, 以下で紹介する参考文献は日本語で読めるものに限定している。

2. はじめの一歩

ルールさえよく知らない素人が競技スポーツでいきなり試合に出ても到底まともにプレーできないのと同じように, 金融の世界でもある程度の予備知識がなくては現場では手も足も出ない。最終的にビジネスの現場で通用するレベルの知識を習得するには, まずは入門レベルの金融論のテキストに目を通して金融論のいろはを知ってしっかり足場を固めてからから先に進むのが肝要である。

諸君の中には何とか小難しそうなテキストを読まずに済む方法はないかと思う人がいるかもしれない。確かに苦労せずに直ぐに必要な知識が身につく確実な方法があればそれに越したことはない。しかし, 残念ながら安直で確実な方法はないと思って間違いない。特に, 変化の早い金融市場では, 表面的な動きに惑わされない, 背後にある本質を見通す柔軟なものの見方が求められる。ビギナーズ•ラックや付け焼刃の知識に頼っていては, 運よく一時しのぎが出来ることはあっても長続きはしない。修羅場でも通用する高い水準の到達点を目指すのであれば, 基礎から体系的に知識を身につける王道を歩むのが, 初めのうちは遠回りしているように思われるかもしれないが結局は確実に目標に到達する最短経路である。

書店の店頭に行くと, 初学者向けの金融のテキストとして, 非常にたくさんの本が並んでいる。その中から初学者が自分の目的にあった適当なものを選ぶのは必ずしも容易ではない。ここでは, 金融論の初級テキストの

中で，金融ビジネスの理解を助ける記述が比較的多いという特徴があるものとして，池尾他（2004），斎藤（2003），花輪他（2002）を挙げておく。

不案内な分野の専門書を読むときに大事なことは，最初から全部完璧に理解できなければだめだなどと堅苦しく考えないことである。分かるところから読んでいけば，何度か繰り返し読むうちに全体が理解できるようになる。何度も繰り返し出てくるキーワードの意味を早めに用語辞典などで確認する習慣をつけると理解度が早く高まるので，金融を学ぶ際には金融用語辞典を手元に置いておきたい。金融用語辞典には，分厚い机上用のものから携帯が容易な新書サイズのものまでいろいろなものがあるので，自分の使い方に合ったサイズのものを選ぶと良い。金融用語辞典の主なものには，貝塚他（2005），吉野他（2005），ダウンズ・グッドマン（2002），ロイター（2002），深尾（1998）などがある。

３．体系的な学習

金融ビジネスにおける大局的な判断力をつけるには，ビジネスのめまぐるしい移り変わりの底流にある「本質」をがっちりつかむことが何より肝要である。金融の現場で日々起きる現象の本質を深く理解するために，金融取引が行われる場である金融市場を支える基盤となる制度的な環境に関する知識に加えて，金融市場を分析する理論的な枠組みに関する知識が必要になる。金融の制度面全般を概観するのに適した文献としては，ここでは鹿野（2001）を挙げておく。

金融の理論面だが，伝統的な金融論はもともと主にマクロの金融政策を分析する分野として体系化されてきたのに対して，最近の金融理論は，ミクロ経済学の系統に分類されるゲーム理論や情報の経済学の発展の成果を取り込むことによって，飛躍的な発展を遂げつつある。このため，最近の金融理論を理解するには，伝統的な金融理論を学ぶ場合にはあまり必要とされなかったゲーム理論や情報の経済学などのミクロ経済学の基礎を習得

しておくことが非常に重要になっている。そこで，ここでは情報の経済学の文献として清水・堀内（2002）と柳川（2000）を，ゲーム理論の文献としてディキシット・ネイルバフ（1991）と岡田（1996）を挙げておく。

ある程度ミクロ経済学の基礎が身についたら，最近の金融理論の学習に進もう。ここでは，最近の金融理論を解説した文献として，金融に付随するリスクの考え方を丁寧に説明した斎藤（2000）や，金融システムの設計という観点から最近の金融理論を整理した酒井・前多（2003）を挙げておく。これらの文献でとりあげられているような最近の金融理論の学習の際にその本質をつかむコツは，金融理論は『お金』の話だという固定観念をまず捨てるということである。「金融」という言葉は「金＝マネー，お金」という字で始まるので，これは詭弁や奇を衒った逆説のように聞こえるかもしれないが，決してそうではない。金融ビジネスの動向を理解する上で重要なのは，金融取引に付随する「お金」の動きにばかりとらわれずに，むしろ取引当事者間の「リスク」や「情報」の動きに注意を向けることなのである。お金にばかり気をとられると，表面的なお金の動きを根底で支配しているリスクや情報などの基本的な問題に対する理解がかえって疎かになり，問題の本質をつかみそこなってしまうので注意しよう。

先に紹介した金融理論の文献は，いずれも日本の研究者の手になるものだが，海外，中でも米国では，ケース・スタディを多用してビジネスを経済学的な視点から分かりやすく解説した優れた内容の本が数多く出版されている。残念ながら，それらの多くは英語で書かれていて，興味深いものが多いケース・スタディで採り上げられているのは日本ではあまり馴染みのない欧米の事例が大半だが，それらの事例から引き出されている結論の大半は普遍的な教訓を含んでいて，理論の解説自体は日本で金融ビジネスを考える上でも非常に参考になる。ここでは，それらの中で日本語に翻訳された文献として，ファイナンス理論のテキストであるボディ・マートン（2001）と，リスク・マネジメントのテキストであるハリントン・ニーハウス（2005），組織の理論のテキストであるミルグロム・ロバーツ（1997）

を紹介しておく。

4. 進んだ学習

ここまでで紹介した文献がカバーしているのは，実際には膨大な数に上る金融ビジネス関連の議論の氷山の一角でしかない。ここでは諸君がさらに進んだ議論の学習に進む場合の手がかりとして，最近比較的世の中で注目されている分野を中心に，個別分野の文献をいくつか紹介する。

4.1. 行動ファイナンス

従来の標準的な経済理論や金融理論に対するよくある批判の一つは，理論が人間の「極端な経済合理性」を想定してきたことに対する批判である。最近は，心理学の研究成果を取り入れて，人間の経済合理性には限界があり人間がしばしば心理に左右されて経済合理性がない行動をとることを前提とした理論である「行動経済学」や「行動ファイナンス」の研究が活発に行われるようになり，その研究成果がビジネスの現場でも応用されるようになってきている。ここでは，行動経済学の文献として多田（2003），行動ファイナンスの文献として末永・三隅（2006），およびシュレイファー（2001）を挙げておく。

4.2. 情報通信技術と金融

インターネットや携帯電話に象徴される情報通信技術革新が社会に大きな影響を与えていることは周知の事実だが，新しい情報通信技術によって金融ビジネスの姿も大きく変貌しつつある。情報通信技術の進歩が金融ビジネスに与える影響については，ウインストン他（2000）や宮村（2003）などの文献が参考になるだろう。

4.3. 金融規制と法

日本版金融ビッグバンによって，日本の金融業に対する公的規制は，厳しい競争制限的規制によって金融システムを安定させることを指向する体系から，市場競争による適者生存を前提として不公正な取引から利用者を保護することを主眼とする体系に大きく舵が切られた。新しい理念に基づいて抜本的な改革が進行しつつある金融法と規制の体系にどう対応するかという問題は，今後の金融ビジネスを考える上で欠かすことのできない重要な課題である。金融規制に関しては，金融ビジネスと規制の関係を論じた岩本他（2001）や，新しい銀行規制の考え方を論じたドゥワトリポン・ティロール（1996）などが参考になる。法と金融ビジネスに関しては，法と経済学を論じた宍戸・常木（2004），細江・太田（2001），三輪他（1998）や，銀行と法に焦点を当てた木下（2005）などが参考になるだろう。

4.4　その他

他にも注目すべき分野は数多くあるが，ここではマスコミでも注目されている分野に関するまとまった文献の中で，中小企業金融の文献として藪下・武士俣（2002），市場型間接金融の文献として池尾・財務省財務総合政策研究所（2006），投資銀行の文献として西村（2005），投資信託の文献としてグレミリオン（2002），M&Aなどで重要になる企業価値分析の文献としてパレプ他（2001）を挙げておく。また，金融ビジネスの未来について，シラー（2004）が非常に示唆に富む議論を行っているので，ここにあわせて紹介しておきたい。

5．生きた情報の把握

ビジネスの現場では，情報収集を怠って時々刻々変化する経済情勢に追随できずに陳腐化した過去の情報に基づいて誤った判断を下す者は，適者生存の原理が働く市場競争では淘汰される側に回ることになる。身につけた基本的な知識をビジネスの現場での日々の実践で使える状態にするため

には，日々の経済情勢の変化に対して常時アンテナを張り，生きた情報を把握してビジネス環境の変化に機敏に対応できる体制を整えておく基本姿勢が欠かせない。

足の速い時事的情報は，毎日金融・経済関連のニュースをチェックすることが基本になる。最近は個人でもインターネット経由でニュースが簡単に入手できるようになってきているので，インターネットを使う方法もあるが，ここでは日本語で書かれた金融・経済関連の新聞や雑誌をいくつか紹介しておく。

まず，新聞では，一般紙の経済面でも最低限の経済・金融関連のニュースをフォローすることはできるが，経済専門紙の『日本経済新聞』（日本経済新聞社）や金融専門紙の『日経金融新聞』（日本経済新聞社）などを読めば，はるかに詳細な情報が得られる。雑誌では，金融関連の月刊誌に，『金融ビジネス』（東洋経済新報社），『月刊金融ジャーナル』（金融ジャーナル社）などがある。経済関連の週刊誌には，『週刊エコノミスト』（毎日新聞社），『週刊ダイヤモンド』（ダイヤモンド社），『週刊金融財政事情』（金融財政事情研究会），『週刊東洋経済』（東洋経済新報社），『日経ビジネス』（日本経済新聞社），国際ニュースでは『ニューズウィーク日本版』（阪急コミュニケーションズ）などがある。

ただし，ただ単にたくさんの情報を入手するだけではほとんど意味がないことに注意しよう。情報技術が発達した今，普通の個人でもその気になれば膨大な経済情報に比較的容易にアクセスすることはできるが，ほとんどの場合，金融の本質に対する理解を深める貴重な手がかりは，金融市場で起きるたくさんの出来事の中に埋もれてしまっている。日々の莫大な情報から重要な情報を取捨選択して本質的な情報だけを抽出・分析するという姿勢を不断に持ち続けていなければ，溢れる大量の情報に翻弄され，本質を見抜くことはおぼつかない。

6．おわりに

「百聞は一見にしかず」というが，金融ビジネスも，やはりビジネスの現場で直に体験してみなくては本質的になかなか理解しにくい部分がある。金融ビジネスに関心を持つ大学生諸君には，卒業後に金融機関で仕事に就くかどうかは別にして，大学に在学する間にインターンシップの制度を活用して，夏休みの機会などに金融機関のインターンとして金融ビジネスの現場を早めに経験してみることをお勧めしたい。インターンシップの募集対象は3年生が多いが，他の学年を対象としたものもあるので，金融ビジネスを体験するチャンスは１年生からある。今は金融ビジネスに対する関心が漠然としたものでしかない場合でも，金融ビジネスを実際に体験すれば，金融ビジネスに関する問題意識が明確になり，取り組むべき課題もおのずと明らかになるはずである。大学生のうちに金融ビジネスの世界に臆せず挑戦して視野を広げてほしい。

〈参考文献〉

- 池尾和人編著，大橋和彦，遠藤幸彦，前多康男，渡辺勉著『入門金融論』ダイヤモンド社，2004年
- 池尾和人，財務省財務総合政策研究所編著『市場型間接金融の経済分析』日本評論社，2006年
- 岩本康志，齊藤誠，前多康男，渡辺努『金融機能と規制の経済学』東洋経済新報社，2001年
- ウインストン，アンドリュー・B.，スタウル，デール・O.，チョイ，スー・ヤン『電子商取引の経済学―オンライン・エコノミックス概論』ピアソン・エデュケーション，2000年
- 多田洋介『行動経済学入門』日本経済新聞社，2003年
- 岡田章『ゲーム理論』有斐閣，1996年
- 貝塚啓明，賀来景英，鹿野嘉昭編『金融用語辞典（第4版）』東洋経済新報社，2005年
- 木下信行『銀行の機能と法制度の研究』東洋経済新報社，2005年
- グレミリオン，リー『投資信託ビジネスの全て』東洋経済新報社，2002年
- 斎藤精一郎『ゼミナール現代金融入門（改訂4版）』日本経済新聞社，2003年
- 齊藤誠『金融技術の考え方・使い方』有斐閣，2000年
- 酒井良清，前多康男『新しい金融理論：金融取引のミクロ的基礎から金融システムの設計へ』有斐閣，2003年
- 鹿野嘉昭『日本の金融制度』東洋経済新報社，2001年
- 宍戸善一，常木淳『法と経済学：企業関連法のミクロ経済学的考察』有斐閣，2004年
- 清水克俊，堀内昭義『インセンティブの経済学』有斐閣，2003年
- シュレイファー，A. 著，兼広崇明訳『金融バブルの経済学―行動ファイナンス入門』東洋経済新報社，2001年
- シラー，ロバート・J.『新しい金融秩序：来るべき巨大リスクに備える』日本経済新聞社，2005年
- 末永雅春，三隅隆司『神と悪魔の投資論―リスクと心理のコントロール』東洋経済新報社，2006年
- ダウンズ，ジョン，グッドマン，ジョーダン・エリオット編『バロンズ金融用語辞典（第5版）』2002年
- ディキシット，アビナッシュ，ネイルバフ，バリー『戦略的思考とは何か』TBSブリタニカ，1991年
- ドゥワトリポン，M.，ティロール，J.『銀行規制の新潮流』東洋経済新報社，

1996年
・西村信勝『外資系投資銀行の現場（改訂版）』日経BP社，2005年
・花輪俊哉，小川英治，三隅隆司編『はじめての金融論』東洋経済新報社，2002年
・ハリントン，S. E.，ニーハウス，G. R.『保険とリスクマネジメント』東洋経済新報社，2005年
・パレプ，クリシュナ・G.，バーナード，ビクター・L.，ヒーリー，ポール・M.『企業分析入門（第2版）』東京大学出版会，2001年
・深尾光洋編『金融用語辞典（第2版）』日本経済新聞社，1998年
・ボディ，ツヴィ，マートン，ロバート・C『現代ファイナンス論（改訂版）―意思決定のための理論と実践』ピアソン・エデュケーション，2001年
・細江守紀，太田勝造『法の経済分析：契約，企業，政策』勁草書房，2001年
・宮村健一郎『アメリカのeバンキング』有斐閣，2003年
・ミルグロム，ポール，ロバーツ，ジョン『組織の経済学』NTT出版，1997年
・三輪芳朗，神田秀樹，柳川範之『会社法の経済学』東京大学出版会，1998年
・柳川範『契約と組織の経済学』東洋経済新報社，2000年
・藪下史郎，武士俣友生編著『中小企業金融入門』東洋経済新報社，2002年
・吉野昌甫監修，津田和夫，楠本博，生駒成，及能正男，由井 真人，早瀬保行編『金融・経済用語辞典（五訂版）』経済法令研究会，2005年
・ロイター『ロイター最新金融用語辞典』ピアソン・エデュケーション，2002年